

体育科・保健体育科

梅本 尚武・栗原 良典・原田 央

I 研究の経緯

1 昨年度までの研究

東雲小学校・東雲中学校では、平成 27 年度より、『グローバル時代をきりひらく資質・能力』を培う教育の創造』をテーマに設定し実践研究を始めた。先行研究や先進校の取り組み、本校の教育目標の分析から、「グローバル時代をきりひらく資質・能力」として主体性・協働性・多様性という 3 つのキー・コンセプトを抽出した。

平成 29 年度からは各教科で小学校から中学校の教育を通して、めざす子ども像を具体的に設定し、「学びを豊かにする授業」をキーワードとして、指導方法および学習内容について研究が続いている。なお、本校がめざす「学びの豊かさ」とは、「子どもたちの主体性・協働性・多様性が相互に影響しながらめざす子ども像に迫っていく状態」と定義した。

令和元年度より「教科等本来の魅力と学びのつながり」を中心に、児童・生徒に「グローバル時代をきりひらく資質・能力」を育むための学びを豊かにする授業を、小学校・中学校教員が協働して研究および授業実践を行って深化させてきた。「教科等本来の魅力」とは、「教科（等）の本質的かついちばんおいしい部分」（石井，2017）であり、これを端的に言うならば、「教科等の本質」と言うことができる。また、この「教科等本来の魅力」（教科等の本質）を追究していくために、教科等における内容の意味をより吟味し、その内容を子どもたちが学んでいくための教科等における方法（本質的なプロセス）が重要となった。教科等本来の魅力に迫る授業を実践することで、児童・生徒の「グローバル時代をきりひらく資質・能力」を育んできた。

体育科・保健体育科においては、「主体性」は運動を楽しむとともに課題に向かって進んで取り組む姿、「多様性」は他者の意見や考えを受容し違いを認める姿、「協働性」は他者との対話や意見交換を通して課題解決に向かう姿と捉えた。研究を進める上で、小学校のリズムダンスと中学校の現代的なリズムのダンスをひとまとめにして表現した概念である「リズム系ダンス」に焦点を当てて研究実践を行った。「リズム系ダンス」は、日本や世界の様々な音楽や踊りに触れるグローバルな視点や他の教科で学んだ知識を身体表現としてより深められるなど、「主体的・対話的で深い学び」に大きな役割を果たすと報告されている（木宮ら，2017）。一方、この「リズム系ダンス」に共通する課題として片渕（2017）は、主体的対話的学習へ向けて「どのようなコミュニケーションやワークによってどのような身体的な体験が生み出されるのか、どのような過程を経て動きの創作が登場するのか、そこに他者はどのように介在する可能性があるのか、このような検討が求められる」と述べている。そこで、小中 9 年間の学びを想定した「リズム系ダンス」のカリキュラムデザインを開発するとともに、量・質の両面から効果の検証を行うことで、「教科等本来の魅力」に迫る授業づくりに取り組んだ。

2 これまでの研究から

「リズム系ダンス」研究を通して、体育科本来の魅力に迫る授業における「学習課題の在り方」の重要性が示唆された。さらにその課題は、発達段階や学習経験といった学習者のレディネスを踏まえることは当然のこと、単元の展開や段階に応じてその内容を整理し計画することが教員に求められると考えられる。

体育科で学習する運動の多くは非日常的な動きを特徴とする。また、学習者はそれぞれ運動経験も身体的特徴も異なり、運動に対する意欲についても差異がある状態から学習が始まる。それら多様な学習者にあつて、自らの身体と向き合い、体育科の学習に「主体性」をもって取り組むためには、第一にそれぞれの運動教材がもつ固有の楽しさを児童が感じる体験を保障することが必要である。教員は、その運動がもつ楽しさは何か、そしてそれを味わうことのできる核となる動きや感覚は何かを理解し、学習者全員がそれを体験できる学習活動を意図しなければならない。従つて単元前半では、学習者の「動きたい」という意欲を掻き立てる「学習課題の在り方」が重要となると考えられる。

運動の楽しさを体験しその動きに慣れてくる中で、よりわざを高めたいという次の意欲に繋げるために、運動の質を高める「学習課題の在り方」が次に設定されるべきだと考えられる。目指す運動像の設定やその解決に至るための手立て等、教員が考えねばならない内容は多岐にわたるが、この際に重要となるのが「協働性」の視点である。運動を学習するという体育科の性質上、自らの動きを理解し高めるためや、共に運動に取り組む仲間として高まっていくため、他者との対話は欠かすことができない手段の一つとなる。この対話が有効になるために、どのような段階に、どのような視点で、どのような形態を設定するかを教員は考え、また普段から「指導者側が動きを言語化しやすい学習環境や学習形態を整えておくこと」（吉田，2018）が必要になってくる。

最後に、運動を学習することの意味・意義は何か、という体育科教育全体を貫く「学習課題の在り方」も意識する必要があると考えられる。マイネル（1981）はスポーツ運動の有用目的という視点から、その領域を「人間の健康維持」「運動系の達成能力の向上」「人間の喜びやレクリエーションの手段」を挙げ、さらにそれらを含むものとして「人間の陶冶と教育」を示している。そこでは「自らの身体との対話、他者身体との交信」が不可欠であり、それゆえ各々が異なる身体を持つという「多様性」を意図せずに学習を進めては、体育科本来の魅力に迫る授業にはなり得ないだろう。教員の授業づくりの視点であるとともに、学習者に身につけていきたい資質・能力である。

以上、これまで「リズム系ダンス」研究を通して示唆された内容を概観してきた。これをもとに、今後はその領域を広げ、様々な運動教材も扱いながらその具体を明らかにしていきたい。

3 体育科本来の魅力

本校ではこれまで、自らの身体を通し運動を楽しみこれを追及しようとする「主体性」、共に運動に取り組み学ぶ他者と豊かに関わる「協働性」、さらにその上で他者が異なる身体をもつという前提のもと理解し尊重し合う「多様性」が相互に影響する授業を目指し、実践研究を行ってきた。その中で、体育科本来の魅力「『こう動きたい』という自発的な運動衝動に突き動かされ、自らの身体や感覚と向き合いながら仲間とともに身体運動の課題を追求し、新たな諸能力を獲得すること」にあると捉えた。

体育科の授業は、「人類が歴史的・社会的につくりあげてきた文化としての身体運動に、社会の要求が実体化した学校・学級と言う制度を背景に、一人ひとりの子どもを出合わせ・関わらせていく」（小林，1985）ものである。この「一人ひとりの子ども」は身体能力も運動経験も、体育科への意欲も多様である。その前提の上に立ちながら、学習者が運動の楽しさを味わうことから主体的に学びを進め、互いに関わりながら協働的に課題解決に向かうには、教師はその身体運動を子どもが学べるようにつくりかえ、授業実践を進めていかなければならない。体育科本来の魅力に迫る授業をつくり実現していくためには、授業者としての教師の資質・能力が求められると考える。

II 本年度の研究

1 研究の目的

これまでの東雲小学校・東雲中学校で追究してきた体育科本来の魅力に迫る授業について、どのような視点で授業づくりをしていけばよいのかを明らかにすることで、教員の資質・能力を具体的に示すことを目的とする。

2 研究の方法

これまでの研究実践を参考に、教員の資質・能力について試案を作成した。この試案を基に、小・中で授業実践を行い、その妥当性を検証する。その概要を表1に示す。

表1 体育科本来の魅力に迫るための教員の資質・能力

資質・能力	視点	資質・能力の具体
授業構想力	目標設定	<ul style="list-style-type: none">・学習者の実態を多面的（興味・関心等の情意的側面，身体能力・運動経験・既習の有無等の運動的側面，わざへの知的な理解・思考力等の認識的側面，他者との関わり方等の社会的側面）に把握する力・運動教材のもつ本質的意義を捉え，学習者の主体的条件や指導の時間的・物理的条件（教具の有無，場の広さ等）に応じて，具体化する力
	教材研究（開発）	<ul style="list-style-type: none">・運動教材のもつ本質的意義を損なうことなく，学習者の実態に応じて発達適格的につくりかえる力・学習内容の抽出・選択（何を教えるのか），教材・教具の構成（何で教えるのか），学習の展開に関する検討（単元計画，発問，学習形態の選択等，どのように教えるのか）を行う力
授業実践力	指導技術	<ul style="list-style-type: none">・端的で的確なマネジメントを行うとともに，学びを深めるための課題発見・探求の機会を保障する力・活動の様子から学習者の実態を把握し，肯定的な動機付けや賞賛，技能の向上に寄与する技能的・矯正的フィードバック等を行う力
授業分析・評価力	授業分析評価	<ul style="list-style-type: none">・児童生徒の学習成果を多面的・多角的に見取る力・教師行動の内容や割合を学習者の姿と結び付けながら省察し，改善していく力

3 検証方法 授業実践（7月～12月）

（1）知識・技能の測定

- ・知識テストの単元前後の統計分析
- ・毎時間の自己評価（学習指導要領原文に基づく評価基準）
- ・実技テスト（VTR録画の分析）の単元前後の統計分析

（2）思考力・判断力・表現力等の測定

- ・毎時間の自己評価・自由記述（学習指導要領原文に基づく評価基準）
- ・腕時計式ボイスレコーダーによる授業中の児童・生徒の会話記録分析
- ・パフォーマンス課題による評価

(3) 学びに向かう力・人間性等の測定

- ・運動への愛好度調査の単元前後の統計分析
- ・毎時間の自己評価・自由記述（学習指導要領原文に基づく評価基準）

(4) 抽出児童・生徒に対するインタビュー調査

- ・単元前に実施する愛好度調査の結果が著しく低い児童・生徒を抽出対象児童・生徒とする。その児童・生徒の愛好度の変化に着目し、今回の授業実践におけるデータを縦断的に蓄積し、その検証を行う。

(5) 授業実践の映像記録分析

Ⅲ 主な引用・参考文献

文部科学省（2017）『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 保健体育編』東山書房。

文部科学省（2017）『小学校学習指導要領解説（平成29年告示） 体育編』東洋館出版社。

国立教育政策研究所（2013）『社会の変化に対応する資質や能力を育成する教育課程編成の基本原
理』

日本教科教育学会（2015）『今なぜ、教科教育なのか—教科の本質を踏まえた授業づくり』文溪堂。

中央教育審議会（2014）『初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について』

グリフィン、マクギー、ケア（2014）『21世紀型スキル—学びと評価の新たな形—』北大路書房。

田村学（2015）『授業を磨く』東洋館出版。

中央教育審議会（2016）『次期学習指導要領にむけたこれまでの審議のまとめ（素案）のポイント』

国立教育政策研究所『国研ライブラリー 資質・能力（理論編）』、東洋館出版社。

杉原隆（2008）『運動指導の心理学』大修館書店。

マイネル（1981）『スポーツ運動学』大修館書店。

金子明友（2005）『身体知の形成』明和出版。

金子明友（2007）『身体知の構造 構造分析論講義』明和出版。

金子明友（2007）『スポーツ運動学 身体知の分析論』明和出版。

佐野淳（1990）「運動の観察と分析」（金子明友・朝岡正雄編著『運動学講義』大修館書店）。

吉田明子（2018）「リズムダンスのサイドランジ学習過程における動感レベルとその内容に関する例
証分析—保健体育科教員の養成課程における学習者を対象として」『教師教育と実践知』3。

三木四郎（2005）『新しい体育授業の運動学』明和出版。

小林一久（1985）『体育の授業づくり論』明治図書。

竹田清彦・高橋建夫・岡出美則（1997）『体育科教育学の探求 体育授業づくりの基礎理論』大修館
書店。

岩田靖（2012）『体育の教材を創る—運動の面白さに誘い込む授業づくりを求めて』大修館書店。

日本体育科教育学会（2021）『体育科教育学研究ハンドブック』大修館書店。